

槐

かい

岡井省二創刊

平成20年7月号

平成二十年七月一日発行 第十八巻第七号 通巻第(一〇五号) (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



思
ひ

高橋将夫

叩いても埃のでもない大田螺
春水にふはりと落ちし毛鉤かな
穂の芽の中にたつぷりある時間
残りたい枝を残して剪定す

川上へ上つてくれぬ花筏

気の合ひて集まつてゐる花筏

佐保姫と越える暗がり峠かな

春闌けて腰に食ひ込むベルトかな

濃縮すれば水滴となる朧

何思うてか亀鳴いてをりにけり

思ふことありて燕のひるがへる

槐安集

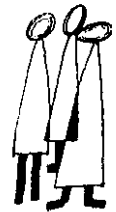
水野恒彦

風葬のいく日過ぎたる椿かな
鳥雲に入りあとかたもなくなりし
雲雀東風の野を走り来よ抱き止むる
海市立つ旅の終りはあさぎいる
言霊に仕へつつみて春深し

延広禎一

見覚えの峯の櫻の根方かな
櫻前線天を言祝ぎ北上す
黙らつしやい鉄砲櫓に恋の猫
沖日差白子掘焼く男かな
寄り添ひし二人静の虚と実と

白子掘=まだ地面に出ていない物



加藤みき

初夏や人を偲びて七度に
容よき後姿や風薫る
破れ傘森に日差しのもどりたる
ながながき別れのホーン風光る
茂りから茂りへ人のつながりて

石脇みはる

春潮の引きぎは早し月と日と
漆絵にたましひのある櫻かな
引力の心にもあり若葉風
真ン中に粽の包広げたる
麦秋や日のあるうちに片付けよ

中島陽華

かはほりに笑まひてゐたる御忌小袖
熱戦のつめたき碁石花の下
パリ祭はがねを削る音ありて
土器はあらぬ方へと春の風
行く春やらくだの鼻の穴あいて

竹内悦子

寺ふたつむすぶ銀杏の芽吹きかな
山吹の蝶は黄色となりにけり
たましひの息づく山のさくらかな
茎立や穴あいてゐるドラム罐
墓石の雨に濡れゐる桜かな

栗栖恵通子

初ざくら「南風一号」折返す
さくらよりさくらへまはる五眼かな
逆打ちの美男遍路やきつね雨
入定ののちの石割桜かな
万緑や二重念珠のゆるみをり

大島翠木

玲瓏となりて辛夷の花明り
花吹雪どこまでもどこまでも
小倉遊亀落花しばらく暮れなづむ
陽炎を青い鴉の横歩き
死はうつつ動くと思ふ蝌蚪の紐

雨村敏子

湖おぼろ花朧なり五色飴
氣比神宮
砂もてる遊行も影もおぼろにて
角つぬ鹿がにはあまたの命みこと花の風
種の浜はのこして帰るさくらかな
湖を見し花を見し夜の醒めてをる

本多俊子

わたつみをたましひ蒼く鶴帰る
草も木も雨も匂ひて招魂祭
春の海金管楽器吹き鳴らせ
蛇穴を出でて朧のぼしたり
火の山を濡らしてをりぬ菜種梅雨

小形さとる

接木する隠語愉しむごとくにて
花の香のくまなく馬頭観世音
葬半ば卯月の山を撫であるく
日を呑んで半月呑んで杓子貝
万愚節となりの犬がついてくる

天野きく江

爺笑ふ千本桜笑ふとき
南へ一靡きして葱の花
穴中に詰まつてをりし細螺かな
労働の男は寡黙藤の花
春雷やそろりと明日へ入れ替る

久津見風牛

海の春潮錆しるき船おろす
たかなの観音うらよりはみ出しぬ
名草の芽羽根ある虫を抱へをり
モナリザの含み笑ひや地虫出づ
芽吹き初む園の深处に眠りたし

近藤きくえ

翌檜に届けとどけとしやぼん玉
石舞台かぎろひ御霊おはしけり
戻れば殊に川辺の雪柳
白雲の上を流るる花筏
花の雨女人高野の釈迦如来

近藤喜子

わたくしの翼ひろがる海市かな
囀や天に光の湧き立ちぬ
春愁の明るすぎたる日差しかな
山霊の抱き寄せてゐる藤の花
星々を呼び出してゐる蛙かな

谷村幸子

鳥つるむ糺の森の水音かな
水甕のあふれてゐたり椎の花
都わすれ咲いて阿国の忌なりけり
花の雲龍神太鼓しみ透る
法螺の音や夕日まぶしき山桜

槐市集

庄司久美子

水晶のブレスレットや糸桜
水無月や測量技師の棒の空
筥棒な碗の値段段よ心太
辛夷咲く脇勧請の大鳥居
濠の雨更紗緋木瓜咲きてをり

鈴木勢津子

日々のこと確かな進歩花は葉に
朧月浮かれ五郎助谷渡る
春灯^{ともし}差し合う街の闇深く
花吹雪木偶の龍神また散らす
平かな丘に虹立つ夏きざし

瀬川公馨

春場所や肘の鼠の疼きたる
白想に耽る男や春の砂
花みもぎダリの天才日記かな
たんぽぽを大業物で切るもよし
泥亀の背ナを机にしたりけり

十川たかし

白牡丹海まで続く屋根瓦
豌豆をいづこも高く仕立てたる
百匹の猫踊りたる八重桜
落椿搔きよせぬたる人の足
かげろへる川下の町一の橋



槐集

高橋将夫選

木の芽雨茶筌の先の音なりき
枚方 中野 京子

赤い芽を上ぐる黒土和魂

来し方は毬藻の中に陽炎へり

開け放つ窓に菜の花湧いてをり

春愁や社の道のさくら彩

海光の涯に青を踏みにけり
岡崎 岩月優美子

能面の容に蜂の古巣かな

菜の花の色に偽善は無かりけり

巨船いま宙に停まり海市かな

立ち止り惜春の音聞きにけり

夢を見むげんげ野にゐて紫雲英いろ
安城 近藤 公子

大日や芽吹きの声のしたる中

でで虫に行き先たずね眠くなる

亀鳴くや辻棲ひとつずらしたる

緋牡丹の前は素通り出来ませぬ

種芋の少ししなびて手に馴染む
枚方 近藤 紀子

葱坊主をちぎりて捨つる自虐かな

いひそびれしことば卵浪の攫ひゆく

アンドロメダの涙となれる蜷の群

鳥の巢のシルエットとなる茜雲

フアウストの罫に落ちたる蝌蚪の紐
奈良 瀬川 公馨

燃えつきし紅白梅の砦なり

袴とんだり土筆のヌーティスト倶楽部

綿毛のおくるみに雀の鉄砲

烏の巢銃の台尻隠さねば

劫火とはならぬ陽炎イエス伝
東京 西村 純太

火焚かずの村に入りたる花の冷

鞘当の因果と因果の蜷の道

紫の袱紗の中の万愚節

春逝くやダリの時計の刻む音

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

来し方は毬藻の中に陽炎へり 中野 京子
過去を振り返ると陽炎のようにほんやりゆらいでいる。過去とはおよそそんなもの。別段驚くほどのことではないが、毬藻の中にそれを見る感性は作者ならではのもの。

菜の花の色に偽善は無かりけり 岩月優美子
一面に咲く菜の花の純粹な黄色を見て、偽善はないと断じた。白色でないところがいい。もったも、偽善が無いということは何善を意識していることでもあるのだが。

夢を見むげんげ野にゐて紫雲英いろ 近藤 公子
紫雲英野に寝転んでいると、自分まで紫色に染まりそう。夢を見れば、夢までげんげ色。

種芋の少ししなびて手に馴染む 近藤 紀子
少ししなびた種芋を見て、手に馴染むと感じたところがほほえましい。何ごとも、かくおおらかに捉えたい。

燃えつきし紅白梅の碧なり 瀬川 公馨
咲き誇っていた紅白の梅も盛りをすぎた。「国破れて山河あり」の大景にズームインした感がある。

春逝くやダリの時計の刻む音 西村 純太
ダリの絵のゆがんだような時計が確かに時を刻んでいる不思議な感覚。惜春の屈折した思いか。

師のあぎとふぐりに花よ降り尽せ 竹中 一花
〈えゝ五體してをる峯の櫻かな〉、〈藻が胸にふぐりにあたり泳ぐなり〉という省二先生の句が懐かしく思い出される。先生の

顎やふぐりはもとより、先生の五體が花に埋もれるまで散り尽してくれたい。

揚雲雀 天界歩む我もよし 中田 禎子
天界は普通に天上の世界と解せるが、私は「神々の住む領域で、人間世界よりはすぐれているが、なお輪廻を免れない六道の領域（欲界、色界、無色界）」という仏教でいうところの世界と解した。揚雲雀が鮮やか。

夜光貝も金色堂もおぼろかな 富松 寛子
金色堂と夜光貝が長い歴史を纏って臙に浮かび上がる。夜光貝が光を放っているようだ。

退屈な貝が潮吹く桃の花 松原 仲子
「私は貝になりたい」という名セリフがあるが、貝になったら退屈で潮を吹いて暇をつぶすしかなさそう。桃の花はのどかだいい。平和だいい。

日月の欠片掬ひて渦見かな 柳川 晋
渦潮を見ていると、時の流れも巻き込まれているように思えてくる。観潮のほんの一時、まるで悠久の時の流れの欠片を掬っているようにも思えてくる。

膝冷えてくる花よりか月よりか 久保東海司
この膝の冷えは花からくるのか、月からくるのかと思案している。なんとも風流。

(以下略)